

## 論 文 要 旨

|  |     |     |       |
|--|-----|-----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙  | 第 号 | 氏 名 | 堤 惠理子 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Effects of exercise on the nephron of Goto-Kakizaki rats: morphological, and advanced glycation end-products and inducible nitric oxide synthase immunohistochemical analyses</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>Journal of Diabetes and Its Complications, in press</p> <p>著者名</p> <p>Eriko Tsutsumi, Yuzo Murata, Maiko Sakamoto and Etsuo Horikawa</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【研究の目的】</b> この研究の目的は運動前後の腎臓における AGEs 局在と iNOS 発現の変化を比較検討することである。</p> <p><b>【動物と方法】</b> 雄性ラットの 4 つのグループを対象とした。WIS SED (Wistar sedentary) グループを対照とし、他のグループは、WIS EX (Wistar exercise) グループ、GK SED (Goto-Kakizaki sedentary) グループおよび GK EX (Goto-Kakizaki exercise) グループであった。exercise グループは、30 分間、15m/min の速度で 1 週間に 3 回、合計 15 週間、トレッドミルで運動を実施した。</p> <p><b>【結果】</b> GK EX (GK exercise) の全パラメーター(ボーマン嚢面積、糸球体面積およびボーマン嚢腔)は、GK SED (GK sedentary) と比較して、小さかった。免疫組織化学的分析では、AGEs 局在は iNOS 染色と類似していた。近位尿細管では、AGEs と iNOS の陽性細胞が SED (sedentary) よりも EX (exercise) のほうが多かった。</p> <p><b>【考察】</b> 今回主な発見の一つは、全グループにおいて皮質深層の近位尿細管で、EX グループの AGEs 蓄積が SED グループよりも多かったことであった。腎臓は糖化ストレスを除去しようとし、AGEs は糸球体で濾過され、近位尿細管で再吸収される。この AGEs は尿細管の再吸収プロセス間に代謝作用で分解され、成分が分別再利用されることが示されている。また、近位尿細管の上皮細胞がメガリン (エンドサイトーシス受容体) によって AGEs を取り込み、適切な運動により AGEs がライソゾームで分解される代謝回転が上昇すると思われる。</p> <p><b>【結論】</b> 運動は、Goto-Kakizaki rat において、GFR および腎小体の形状を回復させ尿細管からの糸球体濾過吸収量を正常化し、また iNOS 発現反応を伴った AGEs の吸収と異化に関与すると考えられる。</p> |     |     |       |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|   |            |    |       |
|---|------------|----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第12624004号 | 氏名 | 江頭 秀一 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Silver oxide-containing hydroxyapatite coating supports osteoblast function and enhances implant anchorage strength in rat femur</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>Journal of Orthopaedic Research in press</p> <p>著者名</p> <p><b>Shuichi Eto</b>, Hiroshi Miyamoto, Takeo Shobuike, Iwao Noda, Takayuki Akiyama, Masatsugu Tsukamoto, Masaya Ueno, Motoki Sonohata, Masaaki Mawatari</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【研究の目的】<br/>人工関節感染は重篤な合併症の一つである。我々はこれまでに銀含有ハイドロキシアパタイト（銀 HA）溶射技術を開発し、その抗菌効果や骨誘導能などを研究してきた。今回銀 HA の骨芽細胞への影響とインプラント生体内固定強度及び骨伝導性について検討した。</p> <p>【方法】<br/>純チタンを基材とし、添加率 0wt%、3wt%、50wt%で酸化銀を添加した HA を表面に溶射し、試験片(円盤、棒)を作製した(HA、3%銀 HA、50%銀 HA)。骨芽細胞前駆細胞株を円盤上で培養し、円盤上の生細胞数と培地中の LDH、ALP を測定した。ラット大腿骨に試験棒を挿入し、2 週、4 週、12 週後に引き抜き試験を行った。また 2 週、4 週後に病理学的評価も行った。</p> <p>【結果】<br/>3%銀 HA の円盤上では多くの細胞が付着・増殖し、HA での結果と有意差なかった。LDH、ALP も HA の結果と同等で、ともに骨芽細胞を傷害することなく、その機能をサポートしていた。骨内固定力は HA と 3%銀 HA 間において、全ての時点で有意差は見られなかった。病理評価でも両群ともに良好な骨伝導性を示していた。</p> <p>【考察】<br/>銀 HA は 3wt%と低濃度であれば、銀によって骨芽細胞が傷害されることなく骨伝導性を発揮し、十分な骨内固定力を示す事ができる。</p> <p>【結論】<br/>抗菌性を有する銀 HA を使用することにより、人工関節治療において術後感染を減少させ患者の QOL 低下を防ぎ、良好な成績が期待できる。</p> |            |    |       |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

|   |   |   |     |      |
|---|---|---|-----|------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 | 号 | 氏 名 | 上田 修 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Development of a novel matrix-assisted laser desorption/ionization time-of-flight mass spectrum (MALDI-TOF-MS)-based typing method to identify meticillin-resistant <i>Staphylococcus aureus</i> clones</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>Journal of Hospital Infection, In press</p> <p>著者名<br/>上田 修、田中真一、永沢善三、花木秀明、菖蒲池健夫、宮本比呂志</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>研究の目的)<br/>matrix-assisted laser desorption/ionization time-of-flight mass-spectrum (MALDI-TOF MS 法)により得られるマススペクトルを解析し、Meticillin-resistant <i>Staphylococcus aureus</i> (MRSA)のクローンを識別することを目的とした。</p> <p>方法)<br/><i>S. aureus</i> (ATCC29213)および臨床分離された MRSA57 株を用いてクローン識別の解析条件を設定し、病院関連感染由来 MRSA24 株のクローン識別が可能か検証した。クローンは pulsed-field gel electrophoresis/phage open-reading frame typing (PFGE/POT)により決定した。また MALDI-TOF MS 法によるマススペクトルの解析には FlexAnalysis software および ClinPro Tools Version 2.2 (Bruker Daltonik GmbH) を用い、クラスター解析は Word's 法を利用した。</p> <p>結果)<br/>検証した解析条件により、病院関連感染由来 MRSA24 株のクローン識別を行った結果、PFGE 法および POT 法と完全に一致した。</p> <p>考察)<br/>検査コストおよび煩雑である PFGE 法や POT 法などの遺伝子検査と比較して、MALDI-TOF MS 法によるクローン識別は、低コストおよび簡便、迅速に実施でき、アウトブレイク追跡調査で利用可能と考えられる。</p> <p>結論)<br/>MALDI-TOF MS 法は MRSA のクローン識別に有用であった。</p> |   |   |     |      |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

|  |     |     |       |
|--|-----|-----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙  | 第 号 | 氏 名 | 岩根 紳治 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Impact of Body Weight Reduction via Diet and Exercise on the Anti-viral Effects of Pegylated Interferon plus Ribavirin in Chronic Hepatitis C Patients with Insulin Resistance: A Randomized Controlled Pilot Trial</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>Internal Medicine. In Press</p> <p>著者名<br/>Shinji Iwane, Toshihiko Mizuta, Yasunori Kawaguchi, Hirokazu Takahashi, Noriko Oza, Satoshi Oeda, Shunya Nakashita, Takuya Kuwashiro, Taiga Otsuka, Seiji Kawazoe, Yuichiro Eguchi, Keizo Anzai, Iwata Ozaki, Kazuma Fujimoto</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>インスリン抵抗性は C 型慢性肝炎患者のインターフェロン治療の抗ウイルス効果に影響を及ぼす。本研究では、生活習慣の改善が C 型慢性肝炎患者のペグインターフェロンとリバビリンによる抗ウイルス効果に影響を及ぼすかを検討した。1b 型高ウイルス量の C 型慢性肝炎患者で、HOMA-IR が 2 以上を対象とした。60 人の患者は介入群と非介入群の 2 群に封筒法により分けた。介入群 (26 人) の患者は現体重の 5%以上の体重の減量を目標に 3 から 6 か月間の食事療法と運動療法を行い、その後インターフェロンの導入を行った。非介入群 (34 人) は特に介入は行わず、インターフェロンの導入を行った。食事療法と運動療法は有意に HOMA-IR を減少させた。介入群のうち 15 人は 5%以上の体重の減量が達成できた。非介入群と比べ、介入群はペグインターフェロン+リバビリンの治療開始後 12 週間のウイルス陰性化が有意に多かった。しかしながら、SVR 率に有意な差は認めなかった。生活習慣への介入により体重を減量させることでインスリン抵抗性の改善が出来、C 型慢性肝炎患者のペグインターフェロン+リバビリンによる早期の治療効果を改善することはできるが、この介入プログラムでは SVR 率には改善が認められなかった。</p> |     |     |       |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|   |     |     |       |
|---|-----|-----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 号 | 氏 名 | 山本 格士 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Molecular analysis of ATP-sensitive K<sup>+</sup> channel subunits expressed in mouse portal vein<br/>(マウス門脈における ATP 感受性 K<sup>+</sup>チャンネルサブユニットの分子生物学的解析)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>Vascular Pharmacology, in press</p> <p>著者名<br/>Tadashi Yamamoto, Kohei Takahara, Tetsuichiro Inai, Koichi Node, Noriyoshi Teramoto</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【研究の目的】</b><br/>ATP 感受性 K<sup>+</sup>チャンネル (K<sub>ATP</sub>チャンネル) の分子構造は、チャンネルポアを形成する内向き整流性 K<sup>+</sup>チャンネル (K<sub>IR</sub>6. x) と調節性サブユニットであるスルフォニル尿素受容体 (SUR. x) の異なる 2 種類のサブユニットタンパク質で構成されていることが知られている。また K<sub>ATP</sub>チャンネルを構成する各々のサブユニットの組み合わせは、臓器の種類によって異なり、臓器特異性を示すことが報告されている。しかし未だ血管平滑筋細胞における K<sub>ATP</sub>チャンネルのサブユニットの組み合わせは明らかになっていない。</p> <p><b>【方法】</b><br/>マウス門脈における K<sub>ATP</sub>チャンネルの薬理的および電気生理学的特性について等張性収縮実験法およびパッチクランプ法を用いて機能学的解析を行った。さらに分子生物学的手法 (RT-PCR 法、リアルタイム PCR および免疫組織化学染色法) を駆使し、K<sub>IR</sub>6. x と SUR. x に関する遺伝子およびタンパク質レベルでの発現について解析した。</p> <p><b>【結果】</b><br/>マウス門脈平滑筋組織にて観察される自発的筋収縮は、K<sub>ATP</sub>チャンネル開口薬である pinacidil あるいは K<sub>ATP</sub>チャンネル制御薬、MCC-134 投与にて可逆的に抑制され、弛緩反応が観察された。また pinacidil および MCC-134 投与による弛緩反応は、SU 剤である glibenclamide または K<sub>IR</sub>6. 1 遮断薬、U-37883A の追加投与にて拮抗された。セルアタッチ法下、pinacidil を投与すると K<sub>ATP</sub>チャンネルが活性化し、本チャンネルは 140 mM K<sup>+</sup>/140 mM K<sup>+</sup>の条件下で約 35 pS のチャンネルコンダクタンスを呈した。また glibenclamide や U-37883A の追加投与にてこのチャンネル活性は可逆的に抑制された。RT-PCR 法において K<sub>IR</sub>6. 1、K<sub>IR</sub>6. 2 および SUR2B のトランスクリプトが検出された。リアルタイム PCR では K<sub>IR</sub>6. 2 と比較し、K<sub>IR</sub>6. 1 の mRNA 発現量が多いことが示された。免疫組織化学染色法では門脈の平滑筋層および急性単離した門脈平滑筋細胞において抗 K<sub>IR</sub>6. 2 反応はほとんど観察されなかったが、K<sub>IR</sub>6. 1 および SUR2B の共発現が観察された。</p> <p><b>【考察・結論】</b><br/>以上の結果から、マウス門脈平滑筋細胞における血管型 K<sub>ATP</sub>チャンネルの構成サブユニットは K<sub>IR</sub>6. 1/SUR2B の組み合わせであることが示唆された。</p> |     |     |       |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|   |   |   |            |
|---|---|---|------------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 | 号 | 氏名<br>光武 翼 |
| <p>[ 論文題名 ]<br/> <b>Greater cervical muscle fat infiltration evaluated by magnetic resonance imaging is associated with poor postural stability in patients with cervical spondylotic radiculopathy</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/> <b>Spine, in press</b></p> <p>著者名<br/> <b>Tsubasa Mitsutake, Maiko Sakamoto, Yuji Chyuda, Shinichiro Oka, Hirokatsu Hirata, Takashi Matsuo, Tsuyoshi Oishi, Etsuo Horikawa</b></p> <p>[ 要 旨 ]<br/> <b>【目的】</b><br/> 頸椎症性神経根症（CSR）は神経根の圧迫によって神経障害を引き起こす。この神経障害は筋肉内の脂肪浸潤の原因となる。一方、姿勢を制御するための固有感覚情報において、頸部多裂筋は筋紡錘密度が高く、姿勢安定性に重要な役割を担う。しかし、頸部多裂筋の脂肪浸潤と姿勢安定性の関係は明らかにされていない。本研究の目的は CSR 患者における頸部多裂筋の脂肪浸潤と静的立位安定性の関係を明確にすることとした。</p> <p><b>【方法】</b><br/> 対象は C6 の CSR 患者 16 名と健常者 25 名とした。頸部多裂筋の脂肪浸潤は MRI を用いて筋肉内脂肪と筋肉間脂肪を計測することで筋肉脂肪比（MFI）を算出した。対象者の姿勢安定性は重心動揺計において開眼および閉眼時の足圧中心の変動を計測した。</p> <p><b>【結果】</b><br/> CSR 患者は健常者と比較して C4 から C6 における頸部多裂筋の MFI および足圧中心の変動が有意に多かった。CSR 患者は C4 から C6 までの各 MFI と閉眼時の足圧中心の変動に中等度の正の相関が認められた。</p> <p><b>【考察】</b><br/> 脂肪浸潤は筋組織の正常な活動を阻害する可能性がある。本研究は下肢における固有感覚の障害がないにも関わらず、頸部多裂筋の脂肪浸潤が直接的な姿勢の不安定性に関与することが示唆された。</p> |   |   |            |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|  |     |     |        |
|--|-----|-----|--------|
| 報告番号<br>甲・乙  | 第 号 | 氏 名 | 清祐 麻紀子 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Comparison of Two Types of Matrix-Assisted Laser Desorption/Ionization-Time of Flight Mass Spectrometers for the Identification and Typing of <i>Clostridium difficile</i></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>Journal of Medical Microbiology, In press</p> <p>著者名<br/>清祐麻紀子、木部泰志、於保恵、草場耕二、下野信行、堀田多恵子、康東天、菖蒲池健夫、宮本比呂志</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>目的</b><br/>マトリックス支援レーザー脱離イオン化飛行時間型質量分析 (MALDI-TOF MS) には Microflex LT Biotyper と VITEK MS の 2 機種があり、同定以外の使用法も注目されている。VITEK MS には VITEK MS IVD ソフトウェア (IVD、Ver2.0) と SARAMIS ソフトウェア (SARAMIS、Ver4.1)、Microflex LT には MALDI Biotyper RTC ソフトウェア (Biotyper, Ver3.1) が搭載されている。本検討では、2 機種 of 3 つの同定システムにおける <i>Clostridium difficile</i> の同定精度について比較検討し、MALDI-TOF MS によるタイピング比較の検証を行った。</p> <p><b>方法</b><br/><i>C. difficile</i> ATCC3 株を用い同定再現性を、臨床分離株 50 株を用い同定精度を比較検討した。また、SARAMIS と ClinPro Tools (Ver2.2) を用いて臨床分離株の系統樹を作成し、比較検証のため、ribotyping、Repetitive sequence-based PCR、毒素遺伝子検査を行った。</p> <p><b>結果</b><br/>IVD、Biotyper では ATCC3 株の同定再現性は 100% であった。臨床分離株の同定では 3 システムとも実用上十分な同定精度を有していたが、VITEK MS のほうが良好であった。臨床分離株 50 株のうち 7 株は同一の毒素遺伝子型であると同時に同一の ribotype であったが、SARAMIS、ClinPro Tools ではこれらを同一のタイプであるとは認識できなかった。</p> <p><b>考察</b><br/>同定精度の差には前処理や培養条件が影響することも知られており、データベース構築の影響も考えられる。MALDI-TOF MS を用いた簡便、迅速なタイピングは <i>C. difficile</i> 感染のサーベイランスに有用であるが、同定に用いた情報で作成した系統樹と遺伝情報によるタイピングの一致は認められないことが示された。</p> <p><b>結論</b><br/>2 機種 of MALDI-TOF MS はともに <i>C. difficile</i> を再現性よく同定可能であるが、タイプ識別に用いることは現時点では不可能であることがわかった。</p> |     |     |        |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

|   |   |   |     |       |
|---|---|---|-----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 | 号 | 氏 名 | 芥川 加代 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p><b>Risk factors for low response to proton-pump inhibitor treatment in reflux esophagitis and non-erosive reflux disease evaluated by the frequency scale for the symptoms of gastroesophageal reflux disease</b></p> <p>プロトンポンプ阻害剤(PPI)による治療抵抗性逆流性食道炎と非びらん性食道炎(NERD)を比較し、FSSG 質問票を用いてそれぞれの治療抵抗性因子を評価する：158 患者での日本多施設共同研究</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/> <b>Esophagus, 12 巻 3 号, 225-232, 2015 年</b></p> <p>著者名<br/> 芥川加代、岩切龍一、原めぐみ、藤本一眞、藤原靖弘、稲森正彦、田中淳二、島谷智彦、秋山純一、安藤貴志、眞部紀明、金城福則、出口隆造、草野元康</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的：PPI 治療抵抗性の逆流性食道炎と NERD で治療抵抗性因子を評価した。</p> <p>方法：胃食道逆流症と診断した日本人 158 人 (男性 70 人 女性 88 人) について、内視鏡検査の結果にて逆流性食道炎 87 人 (男性 48 人 女性 39 人 平均 59.5±15.1 歳) と NERD 71 人 (男性 22 人 女性 49 人 平均 53.0±17.6 歳) に割り付けた。全患者は 4 週間の PPI (ラベプラゾール 10 mg/日) による内服治療を行い、治療前後の FSSG 質問票の点数変化の割合で治療効果を評価した。50%以上の改善率があった患者を治癒良好群とした。逆流性食道炎の治癒良好群 (57 人)、治癒不良群 (30 人)、NERD の治癒良好群 (39 人)、NERD の治癒不良群 (32 人) の 4 群に分類した。</p> <p>結果：PPI 治療にて症状が改善したのは、逆流性食道炎では 65・5%であり、NERD では 54.9%であった。逆流性食道炎の治療抵抗性因子としては、単変量解析では、低身長、高 Body Mass Index(BMI)、多変量解析では低身長であった。NERD の治療抵抗性因子としては、単変量解析では、女性、高身長、低体重、低 FSSG スコア、多変量解析では低 FSSG スコアであった。</p> <p>考察：胃食道逆流症の治療抵抗性因子は、様々なアプローチで検討されており、今後も更なる検討が望まれる。</p> <p>結論：逆流性食道炎および NERD について、FSSG を用いてそれぞれの治療抵抗性因子を検討した。</p> |   |   |     |       |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。



## 論文要旨

|  |     |     |      |
|--|-----|-----|------|
| 報告番号<br>甲・乙  | 第 号 | 氏 名 | 江渡 文 |
| <p>[ 論文題名 ]<br/> Association between occlusal force and physical functions in preschool children ;<br/> a comparison of males and females</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/> The Journal of Physical Therapy Science, 27 巻, 2015 年</p> <p>著者名<br/> Aya HIRAO, Shin MURATA, Atsuko KUBO, Mizuki HACHIYA, Toyoko ASAMI</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b><br/> 本研究は口頭指示が理解可能な 4, 5 歳児に対して, 咬合力をはじめとした身体機能を計測し, 身体機能の把握, 男女の能力の比較, また経年的に計測していくことで幼児の体力の推移等を把握することを目的としている。</p> <p><b>【対象と方法】</b><br/> 各項目を口頭説明で理解できる子ども 331 名に関して咬合力をはじめ, 体重, 身長, 握力, 立ち幅跳び, ボール投げ, Time Up And Go Test, 25m 走を実施した。</p> <p><b>【結果】</b><br/> 分析の結果, 身長・体重以外のすべての項目で有意差が認められ, 男児のほうが女児より有意に値が高かった。男児の咬合力は, ボール投げ以外の項目との間に有意な相関を示した。さらにステップワイズ重回帰分析により, 咬合力と独立して関連する因子として抽出された項目は握力であった。また, 女児の咬合力はすべての項目と有意な相関を示した。さらにステップワイズ重回帰分析により, 咬合力と独立して関連する因子として抽出された項目は握力と TUG の 2 項目であった。</p> <p><b>【考察】</b><br/> 男児・女児ともに握力という上肢の筋力が, 咬合力により, 関連することが示唆された。これは Yoshino らの研究で, 咀嚼能力と握力は男女ともに関連するとの研究結果と同様の結果であった。一方女児は握力に加え, TUG という下肢筋力・バランス・歩行能力、日常生活機能に関わる項目と関連することが示唆された。</p> <p><b>【結論】</b><br/> 幼児の咬合力について, 男児と女児では咬合力に影響する因子に違いがあることが示された。</p> |     |     |      |

備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|   |   |   |             |
|---|---|---|-------------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 | 号 | 氏名<br>八谷 瑞紀 |
| <p>[ 論文題名 ]<br/>Usefulness of a 50-meter round walking test for fall prediction in the elderly requiring long-term care</p>   |   |   |             |
| <p>The Journal of Physical Therapy Science, 27(12), in press, 2015</p>  |   |   |             |
| <p>Mizuki HACHIYA, Shin MURATA, Hiroshi OTAQ,<br/>Takehiko IHARA, Katsuhiko MIZOTA, Toyoko ASAMI</p>  |   |   |             |
| <p>[ 要 旨 ]</p>  |   |   |             |
| <p>【研究の目的】本研究の目的は、高齢者の歩行能力を評価する方法として開発した 50m ラウンド歩行テストの有用性を検討すること。</p>  |   |   |             |
| <p>【方法】対象は、通所リハビリテーションに参加している地域在住虚弱高齢者 166 名（平均年齢 80.5 歳）とした。過去 1 年間の転倒に影響を与える要因を明らかにするために、50m ラウンド歩行テスト、握力、大腿四頭筋筋力、Functional reach test、片足立ちテスト、5m 歩行テストを測定した。統計学的分析方法は、多重ロジスティック回帰分析により検討した。</p>                                       |   |   |             |
| <p>【結果】多重ロジスティック回帰分析の結果、転倒の有無を判別できる変数として選択されたのは 50m ラウンド歩行テストであった。転倒を判別する 50m ラウンド歩行テストのカットオフ値は 0.66 m/sec であった。Receiver operating characteristic 曲線下面積は 0.64 であった。カットオフ値の感度は 65.7%，特異度 63.6%，陽性適中率 55.0%，陰性適中率 73.3%，正診率 64.5% であった。</p> |   |   |             |
| <p>【考察】カットオフ値より判別精度を算出した。測定値が 0.66m/sec 以上で転倒した者の割合（陽性適中率：55.0%）よりも、0.66m/sec 未満で転倒しなかった者の割合（陰性適中率：73.3%）が成績は良好であった。50m ラウンド歩行テストは「転倒する人」よりも「転倒しない人」を判別することの方が有用であることを示している。</p>  |   |   |             |
| <p>【結論】50m ラウンド歩行テストは地域在住虚弱高齢者の転倒判別のために有用な指標となりえることが示された。50m ラウンド歩行テストの結果が 0.66m/sec 以上の高齢者は、転倒リスクが高くなることが予想される。</p>  |   |   |             |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

|   |     |     |        |
|---|-----|-----|--------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 号 | 氏 名 | 枝川 亜希子 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Investigation of <i>Legionella</i> Contamination in Bath Water Samples by Culture, Amoebic Co-Culture, and Real-Time Quantitative PCR Methods</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>International Journal of Environmental Research and Public Health,<br/>12(10), 13118-13130, 2015,</p> <p>著者名<br/>Akiko Edagawa, Akio Kimura, Takako Kawabuchi-Kurata, Shinichi Adachi,<br/>Katsunori Furuhashi and Hiroshi Miyamoto</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【研究の目的】</b><br/>レジオネラ属菌は、生きているが培養できない (viable but non-culturables; VBNC) 生理状態になる菌であり、また、一部の菌種は人工培地で培養できない。そのため、培養法のみではレジオネラ汚染状況の把握は十分ではない。本研究では、レジオネラがアメーバ内で増殖することを利用したアメーバ共培養法の手法を使って、浴槽水中のレジオネラ汚染実態調査を行った。</p> <p><b>【方法】</b><br/>浴槽水 68 試料について、培養法、リアルタイム PCR 法によりレジオネラの検出を行った。アメーバ共培養法は <i>Acanthamoeba</i> を使用し、得られた試料について同様にレジオネラを検出し、それぞれの検出結果の比較検討を行った。</p> <p><b>【結果】</b><br/>培養法により、浴槽水は 11 試料 (16.2%)、アメーバ共培養後試料は 4 試料 (5.9%) からレジオネラを検出した。リアルタイム PCR 法により、浴槽水は 46 試料 (67.6%)、アメーバ共培養後試料は 57 試料 (83.8%) が陽性であった。アメーバ共培養法を行うことにより、30 試料 (44.1%) で 10 倍以上の菌数増加がみられた。いずれの方法でもレジオネラが検出されなかった試料は 6 試料 (8.8%) のみであった。</p> <p><b>【考察】</b><br/>アメーバ共培養法とリアルタイム PCR 法を組み合わせる方法は、浴槽水レジオネラ汚染調査に有用であることが示唆された。また、レジオネラの病原性はアメーバ内での増殖能と密接に関わっていることから、よりヒトへの病原性が高いレジオネラの検出に本手法が有用であると考えられた。</p> <p><b>【結論】</b><br/>アメーバ共培養法とリアルタイム PCR 法を組み合わせることにより浴槽水のレジオネラ汚染調査を行ったところ、高率 (83.8%) にレジオネラに汚染されていることが明らかになった。</p> |     |     |        |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

|   |     |     |       |
|---|-----|-----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 号 | 氏 名 | 植松 崇之 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Loss of CARD9-mediated innate activation attenuates severe influenza pneumonia without compromising host viral immunity<br/>(CARD9 を介した自然免疫活性化の機能的損失は、宿主ウイルス免疫応答を損なわずに重篤なインフルエンザ肺炎を軽減させる)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年</p> <p>Scientific Reports, 5, 17577, 2015.</p> <p>著者名</p> <p>Takayuki Uematsu, Ei'ichi Iizasa, Noritada Kobayashi, Hiroki Yoshida, Hiromitsu Hara</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b><br/>インフルエンザウイルス(IFV)のヒトへの感染はしばしば重篤な急性肺炎と呼吸不全を引き起こすが、医療現場において有効な対策が確立されていない。そこで、本研究では骨髄系免疫担当細胞に発現するアダプター分子である CARD9 に注目し、重篤な IFV 感染マウスモデルを作成し、IFV 感染における CARD9 の機能について検討した。</p> <p><b>【方法】</b><br/>野生型マウスおよび CARD9 欠損マウスを用いて、IFV 経気道感染モデルを作成し、IFV 感染後の免疫応答の差異について検討した。また、CARD9 を発現するマクロファージおよび樹状細胞を調製し、IFV で刺激した場合の炎症性サイトカイン/ケモカイン、I 型インターフェロン産生について検討した。</p> <p><b>【結果】</b><br/>CARD9 欠損マウスでは、樹状細胞から産生される I 型インターフェロンの作用によるウイルス排除能は正常である一方で、炎症性サイトカイン/ケモカイン産生のみが著しく低下し、その結果、肺炎の症状のみが軽減し、マウスの死亡率が大きく改善することが明らかとなった。</p> <p><b>【考察・結論】</b><br/>CARD9 を介した自然免疫の活性化は、重篤なインフルエンザ肺炎の発症に関与することが示唆された。このため、効果的な CARD9 阻害剤を開発できれば、新型インフルエンザなどの急性ウイルス肺炎の理想的な治療薬になると考えられ、重篤なインフルエンザ肺炎の治療法開発に繋がるものと期待される。</p> |     |     |       |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|   |     |     |      |
|---|-----|-----|------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 号 | 氏 名 | 大塚泰史 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p><b>Identification of consensus motifs associated with mitotic recombination and clinical characteristics in patients with paternal uniparental isodisomy of chromosome 11</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>Human Molecular Genetics, in press</p> <p>著者名<br/>Yasufumi Ohtsuka, Ken Higashimoto, Takehiko Oka, Hitomi Yatsuki, Kosuke Jozaki, Toshiyuki Maeda, Kozo Kawahara, Yuhei Hamasaki, Muneaki Matsuo, Kenichi Nishioka, Keiichiro Joh, Tsunehiro Mukai, Hidenobu Soejima</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的と方法】 Beckwith-Wiedemann 症候群 (BWS) の約 20%は、11 番染色体の父性片親性ダイソミー (paternal uniparental disomy: pUPD) モザイクで発症する。多くは染色体短腕の部分ダイソミーで、発生初期の体細胞組換えの結果生じるが、その分子機構は明らかではない。本研究では、pUPD モザイクで発症した BWS 患者 32 名の DNA を用いて、SNP アレイにて pUPD 切断点領域を同定し、その塩基配列から共通配列を見いだすことを目的とした。また、pUPD モザイク患者の中に存在する全染色体父性片親性ダイソミー (paternal uniparental diploidy: PUD) モザイク患者の頻度および特徴的臨床症状について検討した。</p> <p>【結果】 11 番染色体に切断点のある部分 pUPD モザイク 26 例の切断点領域から 4 つの共通配列を同定し、統計学的に切断点領域に有意に存在すること、62%の症例の切断点領域に存在することを見いだした。減数分裂組み換えの共通配列や組み換え開始の指標である H3K4me3 は見いだせなかった。19%の症例に PUD モザイクを認め、部分 pUPD モザイクより高頻度に発達障害、心臓の異常、腫瘍を合併していた。</p> <p>【考察】 体細胞組換えに関連する 4 つの共通配列を初めて同定した。pUPD 切断点領域に減数分裂組み換え因子を認めなかったことから、体細胞組み換えの分子機構は減数分裂組み換えのそれとは異なると考えられた。PUD モザイクは従来考えられていた頻度より高頻度であり、特徴的な症状を有することから、pUPD モザイク患者はすべての染色体について解析すべきと考えられた。</p> <p>【結論】 体細胞組換えに関連する共通配列を同定し、PUD モザイク患者の頻度と特徴的臨床症状を明らかにした。</p> |     |     |      |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

|  |     |     |      |
|--|-----|-----|------|
| 報告番号<br>① 甲 ・ 乙  | 第 号 | 氏 名 | 笹栗弘平 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Small (&lt; 4 cm) Renal Mass: Differentiation of Oncocytoma From Renal Cell Carcinoma on Biphasic Contrast-Enhanced CT<br/>(二相性造影 CT による 4cm 未満の腎オンコサイトーマと腎細胞癌の鑑別)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>American Journal of Roentgenology 205 巻, 999-1007, 2015 年</p> <p>著者名<br/>笹栗弘平、高橋直幹、Daniel Gomez-Cardona、Shuai Leng、Grant D. Schmit、Rickey E. Carter、Bradley C. Leibovich、川嶋明</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的：手術例による報告では、4cm 未満の充実性腎腫瘍 20-30%が良性で、その中でオンコサイトーマが最多である。オンコサイトーマの画像所見は腎細胞癌の所見との重複が多く、術前診断は困難とされてきた。本研究の目的は、二相性造影 CT の画像的特徴からオンコサイトーマと腎細胞癌が鑑別可能か検証することである。</p> <p>方法：二相性造影 CT (皮髄相と腎実質相) が撮影された腎オンコサイトーマ (43 患者 53 個) と腎細胞癌 (123 患者 128 個：乳頭状腎癌 24 個、淡明細胞癌 92 個、その他 12 個) の画像をレトロスペクティブに読影し、複数の画像的特徴を記録した。多項ロジスティック回帰分析を用い、オンコサイトーマと腎細胞癌を鑑別する診断モデルを作成した。腎細胞癌は1) 乳頭状腎癌、2) 淡明細胞癌+その他、の2つのグループに分けて解析した。</p> <p>結果：患者の年齢、腫瘍の CT 値、歪度 (腫瘍内 CT 値のヒストグラム解析)、腫瘍内部の不均一さ、が有意な所見であった。これらの変数を用いた ROC 曲線下面積は、0.82 (オンコサイトーマと淡明細胞癌+その他の鑑別)、0.95 (オンコサイトーマと乳頭状腎癌の鑑別)、0.91 (淡明細胞癌+その他と乳頭状腎癌の鑑別)、0.84 (オンコサイトーマと全腎細胞癌の鑑別) であった。</p> <p>結論：二相性造影 CT における腎腫瘍の増強効果や内部の性状 (不均一さ、歪度) を組み合わせが、オンコサイトーマと腎細胞癌の鑑別に有用であった。</p> |     |     |      |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|  |     |     |        |
|--|-----|-----|--------|
| 報告番号<br>甲・乙  | 第 号 | 氏 名 | 吉村 麻里子 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Induction of p53-mediated transcription and apoptosis by exportin-1 (XPO1) inhibition in mantle cell lymphoma.<br/>(マントル細胞リンパ腫における exportin-1 阻害による p53 の転写活性誘導とアポトーシス誘導)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>Cancer Sci. 105(7):795-801, 2014</p> <p>著者名<br/>Yoshimura M, Ishizawa J, Ruvolo V, Dilip A, Quintás-Cardama A, McDonnell TJ, Neelapu SS, Kwak LW, Shacham S, Kauffman M, Tabe Y, Yokoo M, Kimura S, Andreeff M, Kojima K.</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b> 核外輸送因子 exportin-1(XPO1)は難治性リンパ腫であるマントル細胞リンパ腫(mantle cell lymphoma, MCL)で高発現している。我々は XPO1 の輸送タンパクの一つである p53 に着目し、XPO1 阻害による p53 活性化のアポトーシスへの影響について検討した。</p> <p><b>【方法】</b> MCL 細胞の XPO1 発現量と予後との関連について、データベース Oncomine を用いて解析を行った。p53 変異の有無と XPO1 阻害剤(KPT-185)の感受性の関連について、MCL の細胞株および患者検体を用いて解析を行った。</p> <p><b>【結果】</b> MCL 患者では腫瘍細胞の mRNA レベルで XPO1 が高発現であると生存期間が有意に短縮していた。KPT-185 は MCL 細胞および臨床検体において、p53 依存性および非依存性のアポトーシスを誘導した。KPT-185 のアポトーシス誘導効果は p53 野生型細胞で高かった。KPT-185 は p53 の標的遺伝子を転写誘導し、核内の p53 のタンパク量を増加させた。</p> <p><b>【考察・結論】</b> MCL において XPO1 高発現は予後不良因子であり治療標的となりうる。KPT-185 は MCL に p53 依存性および非依存性のアポトーシスをもたらし、p53 変異の有無は効果を規定する。KPT-185 は p53 の標的遺伝子の転写活性を誘導することで p53 依存性のアポトーシスをもたらし、MCL の治療に有望な薬剤である。</p> |     |     |        |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

|  |     |     |       |
|--|-----|-----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙  | 第 号 | 氏 名 | 中山 敦史 |
| <p>[ 論文題名 ]<br/>Interaction between esophageal squamous cell carcinoma and adipose tissue <i>in vitro</i></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>The American Journal of Pathology, in press</p> <p>著者名<br/>Atsushi Nakayama, Shigehisa Aoki, Kazuyoshi Uchihashi, Aki Nishijima-Matsunobu, Mihoko Yamamoto, Nahoko Kakihara, Ryuichi Iwakiri, Kazuma Fujimoto and Shuji Toda</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【研究の目的】肥満と癌の関連が示唆されているが, 食道扁平上皮癌における脂肪組織の役割とその制御機構は不明である. そこで今回, 食道扁平上皮癌と脂肪組織の相互関係について検討した.</p> <p>【方法】材料は, 食道扁平上皮癌細胞株 (EC-GI-10: 高分化型, TE-9: 低分化型), ラットおよびヒト剖検例の皮下脂肪組織である. 脂肪組織片をコラーゲン・ゲルに包埋し, その上に癌細胞を播種し, 混合培養した. 癌細胞の増殖, アポトーシス, 分化, 浸潤を中心に免疫組織化学, ウェスタンブロット, ELISA 法, siRNA 導入を行い解析した.</p> <p>【結果】脂肪組織は癌細胞の増殖, 浸潤, 分化, IGF-1R, MAPK 及び PI3K-AKT pathway の発現を促進し, アポトーシス, HER2 発現を抑制した. 癌細胞は培養上清中のレプチン, アディポネクチン, レジスチン, IGF-1 の濃度を低下させた. IGF-1 は癌細胞の増殖を促進し, アポトーシスを抑制した. これら IGF-1 の癌細胞に対する効果は, IGF-1R 阻害薬で消失し, 癌細胞のアポトーシスを誘導した. 更に, 癌細胞の IGF-1R を siRNA 導入によりノックダウンすると, 脂肪組織誘導性の変化が消失した. また, 癌細胞は脂肪組織の再生を抑制した.</p> <p>【考察、結論】今回の解析結果では, 脂肪組織が IGF-1/IGF-1R/MAPK/PI3K-AKT pathway を介する食道扁平上皮癌の進展や, HER2 分子標的療法抵抗性に関与することを明らかにした. また, 癌細胞は脂肪組織の再生抑制に関与することも判明した. 我々は, 食道扁平上皮癌と脂肪組織にはこのような密接な相互作用があることを初めて見出した.</p> |     |     |       |

備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。



## 論文要旨

|   |            |    |       |
|---|------------|----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第10624034号 | 氏名 | 山本美保子 |
| [ 論文題名 ]  |            |    |       |
| Interaction between thyrocytes and adipose tissue in vitro<br>in vitro における甲状腺濾胞細胞-脂肪組織間相互作用  |            |    |       |
| 雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年   |            |    |       |
| Pathology International (in press)  |            |    |       |
| 著者名   |            |    |       |
| 山本美保子 <sup>1</sup> 、内橋和芳 <sup>1</sup> 、青木茂久 <sup>1</sup> 、小池英介 <sup>2</sup> 、柿原菜保子 <sup>3</sup> 、戸田修二 <sup>1</sup>  |            |    |       |
| 1) 佐賀大学医学部医学科 病因病態科学講座 臨床病態病理学分野  |            |    |       |
| 2) 小池病院   |            |    |       |
| 3) 佐賀大学医学部看護学科 看護基礎科学講座 看護機能形態学分野   |            |    |       |
| [ 要 旨 ]   |            |    |       |
| <p>【研究の目的】甲状腺と脂肪組織は、代謝の中心臓器であり生体恒常性に必須の臓器である。近年、脂肪組織を基盤とした肥満と甲状腺機能異常や甲状腺癌との関連が示唆されている。さらに、甲状腺周囲には豊富な脂肪組織が存在する。それ故に、甲状腺と脂肪組織の活発な相互作用の存在が推測されるが、その詳細は不明である。【方法】ラット皮下脂肪組織片を包埋したコラーゲングル層上に、ブタ甲状腺組織から初代培養した濾胞細胞を播種した。細胞動態を、HE染色、電子顕微鏡、免疫組織化学、Real-time RT-PCR、ELISAで解析した。【結果】脂肪組織は、濾胞細胞の肥大、細胞質内脂肪滴貯留、サイログロブリン、PAX8の発現を促進した。また濾胞細胞のアポトーシスを抑制した。一方、濾胞細胞は培養液中のアディポカイン濃度に影響を与えた。脂肪組織における leptin、adiponectin、PPAR<math>\gamma</math> の mRNA 発現を促進した。濾胞細胞単独培養に leptin を投与すると、濾胞細胞の肥大、サイログロブリン発現の増強を認めた。【考察】脂肪組織は、濾胞細胞の肥大と分化を促進し、アポトーシスを抑制した。濾胞細胞は、脂肪組織の mRNA 発現に影響を及ぼし、上清中のアディポカイン濃度が変化した。脂肪組織が濾胞細胞に与える変化の仲介因子として leptin の可能性が示唆された。【結論】我々は、濾胞細胞-脂肪組織間の相互作用解析モデルを開発し、活発な相互作用を確認した。今後肥満と甲状腺疾患、肥満と甲状腺癌の関連を明らかにする有用な解析モデルである。</p> |            |    |       |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

|  |     |     |       |
|--|-----|-----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙  | 第 号 | 氏 名 | 大野 憲五 |
| <p>[ 論文題名 ]<br/> <b>Re-evaluation of Temporal Changes in Alveolar Protrusion in Japan According to Two Newly Introduced Craniometric Angles</b><br/> (日本人の歯槽突出における時代変化の新設 2 頭蓋計測角を用いた再評価)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/> <b>Anthropological Science (in press)</b></p> <p>著者名<br/> <b>Kengo Ohno, Yoshinori Kawakubo, Akio Kuraoka</b></p> <p>[ 要 旨 ]<br/> 日本人頭蓋形態の時代変化において, 古墳時代から現代までの期間で中世の人々が最も強い歯槽性突顎を有していたというのが今日, 定説となっている. この歯槽性突顎については一般的に <b>alveolar profile angle (nasospinale と prosthion を結ぶ線が耳眼水平面 [FH] となす角)</b> で評価されてきた. しかし, この方法が本当に歯槽性突顎の評価に適切かどうかについては見解が分かれている. そこで本研究では, 3次元計測器で取得した頭蓋の計測点座標を用い, これまで曖昧であった歯槽性突顎と顔面性突顎を独立して評価可能な新たな方法を考案し, 日本におけるそれらの時代変化を調査した. 研究対象には, 北部九州・山口地方に由来する古墳時代から現代までの成人男性頭蓋を用いた. 顔面性突顎については <b>nasion (n) と subspinale (ss) を結ぶ線が FH となす角 (MPA)</b>, 歯槽性突顎については <b>n-ss 線が prosthion-ss 線となす角 (APA)</b> で評価した. 解析の結果, <b>APA</b> は古墳時代から現代まで有意な変化を示さなかった. 一方, <b>MPA</b> では中世にピークが認められた. 以上の結果より, 歯槽性突顎には時代間の顕著な変化が無く, 顔面性突顎が中世で最も強かったことが明らかになった. これまで定説とされてきた中世人の歯槽性突顎の強さには, 顔面性突顎が強く関わっている可能性が高い.</p> |     |     |       |

備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|   |     |     |        |
|---|-----|-----|--------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 号 | 氏 名 | 柿原 奈保子 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Moisturizing effects of cold process soap treatment in mouse burned skin: A potential effectiveness of cold process soap in complementary medicine</p> <p>熱傷皮膚モデルマウスにおけるコールドプロセス製法石鹼の保湿効果：補完医療としてのコールドプロセス製法石鹼の潜在的効果</p> <p>雑誌名，巻（号のみの雑誌は号），頁－頁，発行西暦年</p> <p>Journal of Japanese Society of Aromatherapy (2016, in press)</p> <p>著者名</p> <p>Nahoko Kakihara, Mihoko Yamamoto, Shuji Kitajima, Shigehisa Aoki, Yutaka Narisawa, and Shuji Toda.</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】皮膚熱傷治療において創部の洗浄と保湿は表皮再生に関与することが示唆されているが、熱傷創部の種々の石鹼洗浄による保湿と表皮再生への影響は知られていない。</p> <p>【方法】9週齢ICR系統雄マウスの背部に水蒸気噴射にて第Ⅱ度熱傷皮膚モデルを作成し、以下の石鹼洗浄における創部の保湿、痂皮形成、表皮再生を検討した。①牛乳（CM）石鹼（機械練り釜焚き製法）、②弱酸性洗浄剤ビオレ（CMAL石鹼、中和製法）、③100%オリーブオイル石鹼（コールドプロセス[CP]製法）、④100%アルガンオイル石鹼（CP製法）、⑤コントロール群（CL、蒸留水洗浄）。1日2回、朝（8時）と夕（8時）に1分間の石鹼洗浄を13日間実施した。保湿率をモイスターチェッカー（MY-808S、スカラー社）で、痂皮形成をskin microscopeで、表皮再生を組織形態で検討した。【結果】CP製法石鹼は表皮の保湿をCM、CMAL石鹼より有意に促進し、表皮再生をCL、CM及びCMAL石鹼より有意に促進した。CP製法石鹼が痂皮形成を最も減少させる傾向が見られた。オリーブオイルとアルガンオイル石鹼間では有意差は見られなかった。【考察・結論】本研究は、CP製法石鹼洗浄が皮膚熱傷創部の保湿、表皮再生を促進することを初めて明らかにした。この結果は、CP製法石鹼洗浄が皮膚熱傷の代替医療に応用可能なことを示唆している。</p> |     |     |        |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|  |     |     |       |
|--|-----|-----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙  | 第 号 | 氏 名 | 山内 康平 |
| <p>[ 論文題名 ]<br/> Effect of additional surgery after noncurative endoscopic submucosal dissection for early gastric cancer</p> <p>[ 題名和訳 ]<br/> 早期胃癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術非治癒切除症例の長期予後についての検討</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/> Endoscopy International Open (in press)</p> <p>著者名<br/> Kohei Yamanouchi, Shinichi Ogata, Yasuhisa Sakata, Nanae Tsuruoka, Ryo Shimoda, Atsushi Nakayama, Takashi Akutagawa, Shimpei Shirai, Eri Takeshita, Koji Yamamoto, Kazuma Fujimoto, Ryuichi Iwakiri</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】早期胃癌に対する Endoscopic submucosal dissection (ESD)非治癒切除症例の長期予後は不明な点が多い。本研究の目的は早期胃癌に対する ESD 後非治癒切除症例の長期予後を調査し、その予後関連因子を明らかにすることである。</p> <p>【方法】2001年～2012年に早期胃癌に対して ESD を施行され、非治癒切除となった症例を対象とし、追加外科手術、経過観察群に分けて後ろ向きに検討した。</p> <p>【結果】958症例の早期胃癌患者に対して ESD が施行され、36ヶ月以上経過が追えたか、胃癌関連死亡のイベントが発生したものは79例であった。非治癒切除症例のうち、追加外科手術群 28例(35.4%)、経過観察群 51例(64.6%)であり、平均年齢は追加外科手術群 71.6±1.5歳、経過観察群 75.8±1.2歳と経過観察群で有意に高齢であった。全生存率の解析では有意に追加外科手術群が優れていたが、疾患特異的生存率は両群で有意な差は認められなかった。交絡因子を調整した多変量解析では、全生存率で両群に有意な差は認めなかった。</p> <p>【考察・結論】早期胃癌に対する ESD 後非治癒切除症例において、生命予後は同様の傾向を示した。死因の多くは胃癌以外の他病死であり、術時の年齢や基礎疾患が予後に大きく関連している事が示唆された。追加外科手術が行えない場合は、厳重な経過観察が許容される可能性もあると考える。</p> |     |     |       |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

|   |     |     |       |
|---|-----|-----|-------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 号 | 氏 名 | 山口 俊介 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>Increase in Endoscopic and Laparoscopic Surgery Regarding the Therapeutic Approach of Gastric Cancer Detected by Cancer Screening in Saga Prefecture, Japan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>Internal Medicine (in press)</p> <p>著者名<br/>Shunsuke Yamaguchi, Yasuhisa Sakata, Ryuichi Iwakiri, Megumi Hara, Kayo Akutagawa, Ryo Shimoda, Daisuke Yamaguchi, Hidenori Hidaka, Hiroyuki Sakata, Kazuma Fujimoto, Masanobu Mizuguchi, Yuichiro Shimoda, Hiroyuki Irie, Hirokazu Noshiro (山口 俊介, 坂田 資尚, 岩切 龍一, 原 めぐみ, 芥川 加代, 下田 良, 山口 太輔, 樋高 秀憲, 坂田 祐之, 藤本 一眞, 水口 昌伸, 下田 悠一郎, 入江 裕之, 能城 浩和)</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的: 近年胃癌に対する内視鏡的治療と腹腔鏡手術は進歩してきたが、これら治療法の増加は完全には証明されていない。本研究では、2002年4月から2011年3月の間に日本の佐賀県において癌検診で発見された胃癌に対する治療法の変化を調査することを目的とした。</p> <p>方法: X線による胃癌検診は、2002年4月から2011年3月の間に計311,074人に対して実施されその後534人が胃癌と診断された(治療法が不明であった18例は除外した)。治療法の変化を評価するため観察期間を以下のように3年ごと3期間に分けた: 期間I: 2002年4月から2005年3月。第II期: 2005年4月から2008年3月。期間III: 2008年4月から2011年3月。それぞれの観察期間において患者の年齢、性別、腫瘍の特徴(発生部位、深達度、組織型)、治療法について検討した。</p> <p>結果: 治療法で開腹胃切除術は減少し、腹腔鏡手術および内視鏡治療は時間依存的に顕著に増加した。I期と比較してIII期では内視鏡的治療で2.5倍の増加、および腹腔鏡手術で18.4倍の増加であった。患者背景や腫瘍の特徴に変化は見られなかった。</p> <p>結論: 佐賀県の胃癌検診で発見された胃癌の腫瘍の特徴は変化しなかったが、胃癌に対する内視鏡治療や腹腔鏡手術は調査期間を通して増加した。</p> |     |     |       |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|   |     |     |      |
|---|-----|-----|------|
| 報告番号<br>甲・乙   | 第 号 | 氏 名 | 志田雅明 |
| <p>[ 論文題名 ]</p> <p>低酸素環境下の胃癌細胞株において、ミトファジー機構の破綻により mtROS/HIF-1<math>\alpha</math> 相互作用が強まり、癌悪性度が亢進する。</p> <p>Impaired mitophagy activates mtROS/HIF-1<math>\alpha</math> interplay and increases cancer aggressiveness in gastric cancer cells under hypoxia</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>International Journal of Oncology in press</p> <p>著者名</p> <p>志田雅明 MASAAKI SHIDA</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>ミトコンドリアオートファジー (ミトファジー) は、酸化ストレス等で障害を受けたミトコンドリアを除去する品質管理機構と考えられている。(目的) 低酸素刺激により誘導されるミトファジーと胃癌細胞の悪性度増強の関係について解析・検討した。(方法) スキルス胃癌細胞株 58As9・44As3 および非スキルス癌細胞株 MKN45 を 1%酸素下で経時的に培養し、in vitro 癌悪性度、低酸素誘導因子 (HIF-1<math>\alpha</math>) 発現、ミトコンドリア活性酸素 (mtROS) 産生およびミトファジー誘導能を解析した。(結果) 低酸素環境下での HIF-1<math>\alpha</math> 発現量と悪性度評価では、58As9・44As3 は MKN45 に比し有意な亢進を示し、また、細胞内 ROS 産生量を FACS で測定すると、58As9・44As3 でのみ経時的 ROS 上昇を認めた。さらに、NAC 投与により ROS を中和すると 58As9・44As3 の HIF-1<math>\alpha</math> 発現は著明に抑制された。ここで我々は、ミトファジー機構破綻による過剰 mtROS 蓄積機序を推測し、LC3-I/II、SQSTM1/p62 の発現解析および蛍光顕微鏡による局在発現解析を行った。その結果、MKN45 のみ低酸素刺激により正常にミトファジーが誘導されていた。また、MKN45 の低酸素下でのミトファジー誘導を阻害すると、ROS 増量、HIF-1<math>\alpha</math> 発現延長さらには悪性度増強が見られた。(考察・結論) スキルス胃癌は浸潤・転移能が極めて高く抗癌剤にも耐性を示す高悪性度癌である。スキルス胃癌の高悪性度発現の機序として、腫瘍内低酸素環境とミトファジー機構破綻により mtROS/HIF-1<math>\alpha</math> 相互作用が強くなり、癌浸潤・増殖能増強すると考えられた。</p> |     |     |      |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

|  |     |     |       |
|--|-----|-----|-------|
| 報告番号<br>① 甲 · 乙  | 第 号 | 氏 名 | 細矢 和久 |
| <p>[ 論文題名 ]<br/>Failure mode and effects analysis of medication adherence in patients with chronic myeloid leukemia</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年<br/>International Journal of Clinical Oncology, in press</p> <p>著者名<br/>Kazuhisa Hosoya, Sakiko Mochinaga, Akiko Emoto, Hiromi Yokoo, Hideaki Tokushima, Masayoshi Egoshi, Naoko Sueoka-Aragane, Shinya Kimura</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】<br/>慢性骨髄性白血病 (CML) の治療において、医療費の自己負担額が高い患者では、ABL チロシンキナーゼ阻害剤 (ABL TKIs) の服薬アドヒアランスが低下することが報告されているが、その影響度は明らかにされていない。本研究は、Failure mode and effects analysis (FMEA) を応用し、高額な薬剤費が服薬アドヒアランスに及ぼす影響を評価した。</p> <p>【方法】<br/>2012年10月～2014年5月に当院のCML患者54名を対象にアンケートを行った。調査項目は服用しているABL TKIの種類、服薬アドヒアランス、副作用、高額療養費制度の利用、服薬アドヒアランスに影響を及ぼす因子 (治療効果の理解度、副作用、高額な薬剤費、服薬の生活習慣化) に関する内容とした。調査結果をFMEAで解析した。</p> <p>【結果・考察】<br/>服薬アドヒアランスに影響を及ぼす因子の危険度は、服薬の生活習慣化 (7.0±1.0) が最も高く、治療効果の理解度 (4.9±0.6)、副作用 (3.8±0.8)、高額な薬剤費 (2.2±0.5) の順であった。高額な薬剤費の影響は4種類の因子のなかで最も低かった。高額療養費制度の利用率が96.3%と高く、患者の医療費軽減策の効果が示唆された。</p> <p>【結論】<br/>ABL TKIs の服薬アドヒアランスを向上させるためには、患者教育や生活習慣に応じた服薬タイミングの工夫など継続的な服薬支援が必要である。</p> |     |     |       |

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。